

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

ほりのまさお
堀野正雄 (1907-1998) は、1927年に東京高等工業学校 (現：東京工業大学) 応用化学科を卒業後、松竹キネマへ入り蒲田撮影所普通写真部へ配属されました。またオリエンタル写真工業の嘱託として、サイエンスとメカニズムに裏打ちされた表現を追求する写真作家活動を行い、1929年に「国際光画協会」、1930年に「新興写真研究会」の創設に加わり中心メンバーとなっています。

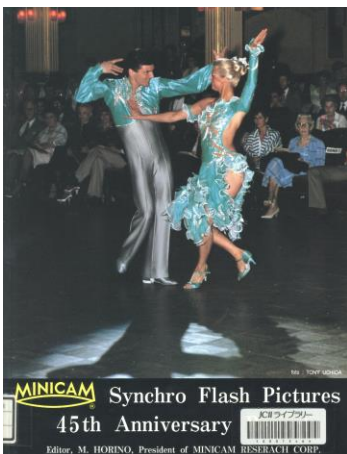
1930年には、『フォトタイムス』などに発表した写真・映画・演劇論をまとめ、『現代写真芸術論』(天人社)を著しました。さらに作品集として『カメラ・眼×鉄・構成』(木星社書院・1932年)をまとめています。



『現代写真芸術論』

1933年には『婦人画報』の嘱託となり、まだ珍しかったフリーのプロ写真家として活動します。1938年ごろからは「報道写真」の分野を手がけ、当時の仕事と未発表作をあわせて後年に『満蒙開拓団の回想 その周辺 50年前の軌跡』(堀野洋子記念親洋会事務局・1993年)としてまとめています。このころの著書には、『正しい露出と写し方』『女性美の写し方』(新潮社・1938年)、『私の写真術』(同・1939年)、『ライカの第一歩』『ライカの第二歩』(アルス・1940年)があります。

1940年には主婦の友社の特派員として南京へ派遣され、そのまま陸軍報道部嘱託となり上海で終戦を迎えました。その後国民党系雑誌『改造畫報』写真部員として残留し、帰国後はDPE業に携わるなど写真家活動を停止しましたが、1948年に体験的技術論と好感をまとめた『吾等の写真術』(六和商事出版部)を著しています。



『MINICAM Synchro Flash Pictures 45th Anniversary Report』

1949年12月には「ミニカム研究所」を設立し、写真家としての経験を基にフラッシュガンの製造を開始しました。やがて写真用ストロボの開発・製造に携わります。各社が小型ストロボを手がけるようになると、報道、営業写真などのプロユーザーに向けた大光量ストロボを専門に扱いました。また写真用ストロボの応用として1960年代ごろから空港滑走路誘導灯、船舶用航行管制灯、捕鯨浮標灯などの業務用閃光装置を手がけました。

写真用ストロボについての業績は、『MINICAM Synchro Flash Pictures 45th Anniversary Report』(堀野洋子記念親洋会事務局・1995年)にまとめているほか、『写真工業』の1990~91年発行分に掲載された広告「frontier MINICAM」で、国産ストロボメーカーの先駆者としての回想などを堀野が記しています。また同誌1996年2月号には堀野のインタビュー記事が掲載されています。

写真家としての先進的表現については、『日本の写真家12 堀野正雄』(岩波書店・1997年)に集約されているほか、没後に東京都写真美術館で回顧展が開かれ、図録として『幻のモダニスト 写真家堀野正雄の世界』(国書刊行会・2012年)が発行されました。